

---

# 機動戦士ガンダムSEED外伝 ～C.E.大戦秘話～

MLモンスター

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士ガンダムSEED外伝 〈C・E・大戦秘話〉

### 【Nコード】

N5057D

### 【作者名】

MLモンスター

### 【あらすじ】

地球とプラント、ナチュラルとコ・デイナーターの戦争。正史では語られなかった、一人の青年の戦いが始まる…

## Before Prologue - 登場人物

〔登場人物〕

マコト・ラム

オーブ軍 第07モビルスーツ隊 三尉

17歳

ハーフコディネーターであり、両親は幼いときにテロに巻き込まれ、死亡。

ヘリオポリス生まれであり、

15の時地球に降りてオーブ軍に入隊した。MS隊の07隊の隊員になる。

乗機はオーブ初の量産型モビルスーツ、M1アストレイ。

ビルナード・アギス

ザフト軍FAITH ブラックホール隊隊長

24歳

コディネーター

前大戦を戦い抜いたベテランパイロットであり、大戦末では特殊部隊、ブラックホール隊の隊長に任命された。表向きはプラントに忠実な兵士だが、真意は不明。

リイータ・アーシエン

オーブ軍 一曹

17歳

ナチュラル

主人公と幼馴染。ヘリオポリス陥落に巻き込まれ、オーブへ。

そのきつかけでオーブ軍に入隊する。  
オーブで当時開発中のM1アストレイのパイロットの一人として選ばれたマコトと再会。

ウィリアム・フルズ

オーブ軍 一尉

第07モビルスーツ隊長

元ベテラン戦闘機乗り。厳しい性格だが、部下思いであり、隊のからの信頼は高い

ジャスティン・マイク・スミス

オーブ軍 二尉

第07モビルスーツ隊所属

アグレッシブな戦闘を好んでおり、時々攻撃中に大きな隙ができてしまう。

アキラ・ワカタ

オーブ軍 二尉

第07モビルスーツ隊所属

射撃が得意で元スナイパー、モビルスーツ戦でもその能力は健在である。そのため、部隊（特にジャスティン）の援護役でもある。

トモヒサ・アーシエン

オーブ軍 二佐

リイータの父親であり、彼女の入隊には反対していた。

## ザ・プロローグ

機動戦士ガンダムSEED外伝 〈C.E.大戦秘話〉  
ザ・プロ  
ローグ

コズミック・イラ71年6月15日

オーブ付近に配置していた地球連合軍はオーブに対して、攻撃を開始した。

目的はオーブのマスドライバー施設、ザフトに全てのマスドライバーを失っていた連合は中立国のオーブの施設を欲していた。

「オーブ解放作戦」の始まりであった。

その数分前：

「死なないといいね、私達。」

「そうだな。」

基地内廊下で二人の少年と少女がいた。少年の名はマコト・ラム、少女の名はリータ・アーシェン。彼らは幼馴染であり、普通に会話するのは当たり前だが、今回は違う。彼らにとって、これは最後の会話になるかもしれない。兵士である彼らはもうすぐ戦闘に入る事になる。マコトはパイロットとして、リータは整備兵として。

「…結局ここも戦争になるんだね。」

「……」

「想像しなかつたよ。戦争でも、中立国にいたから全然平気だと思つた。でもあの時、ヘリオポリスから脱出して、崩壊して、“これが戦争なんだよ”って思い知らされた。」

リイータは数ヶ月前を思い出す。ごく普通の民間人だったリイータは故郷のコロニー、ヘリオポリスがザフトの侵攻によって崩壊した。彼女はうまく避難して本国に救出されたが、あの時の恐怖を忘れられなかつた。これがきっかけでオーブ軍に入隊。父親も軍人であったが、反対していらしい。彼女の幼馴染であるマコトはすでに15の時に地球に降り、軍に入隊していて、ヘリオポリスの崩壊を知つたときはすでに当時開発中だったM1アストレイのパイロットとしてモルゲンレーテにいた。

「ここでの戦闘、絶対勝たなければならない。俺達の居場所を無くす気はないからな。」

マコトは笑顔で答えるが、その笑みは長く続かなかつた。基地内に敵襲のアラームが鳴りはじめ、同時に外の砲撃が始まつた。

「俺はもう行く！生きろよリイータ！死ぬなよ！」

そう言い、自分の機体があるMSデッキへ向かう。

リイータは離れていくマコトの背中をただただ見ているだけだつた。

デッキに着いたマコトは周りを見渡す。

「隊長たちは？発進準備に入っている！急がないと……」

そう言い、自分のM1アストレイに乗り込み、起動スイッチを押し、画面に「ORB」の文字が現れる。  
そこに一人の男性が通信してくる。

「ラム三尉、遅いぞ！俺達は先に出る。」  
「隊長、すいません。すぐに追いつきます！」

ウィリアム隊長は通信を切り、付いてくる他の2機と共に出口を通る。

「本国を守るぞ！07隊、隊長のウィリアム・フルズだ、出るぞ！」  
「07隊、アキラ・ワカタ、出る！」  
「ラム！早くしろ！07隊、ジャスティン・スミス、行くぜ！」

最後に残っていたマコトも発進準備にかかる…  
M1アストレイはゆっくりと一步、また一步と前に進みはじめる。

「遅れをとってしまった…07隊、マコト・ラム、発進します！」

一話へ続く…

## 第一話 〈初戦〉

「なんて数だ！うようよいやがる……。」

アキラは迫ってくる連合の大軍に弱音を吐いてしまう  
つい先程までの緑の溢れた、平和なオーブの大地はストライクダ  
ーの大部隊によって炎に焼かれていた。青空も黒い煙で溢れ、  
地球連合軍がどれだけ巨大な組織なのかを、アキラは思い知られた。

「アキラ、前を見る！」

スマスに再び現実へ戻されるアキラ、目の前にはサーベルを抜いた  
ダガーが突撃してくる。

「野郎………！近づく前に！」

アキラは敵にトリガーを引き、敵機に直撃した。

「今度は左、2機！」

その瞬間、後方から援護のビーム射撃が1機のダガーに直撃、残っ  
た1機をアキラが撃ち倒す。

「ラム三尉か！」

「はい、遅くなってすいません、遅れた分は取り戻します。」

合流したマコトは急いで自分の位置へつく。

これで第07MS隊は全員そろった。

「B6エリアで味方の守りが崩れている、ここはアークエンジェルに任せて、援護に向かう。」

「了解」「」

目的地へ移動する中、空中では翼をもったMSが3機の連合軍MSと対峙していた。

激戦が続く中、07隊はMSだけでなく、空からの戦闘機の攻撃にも注意していた。

実弾無効のPS装甲を持たないM1にとって、どんな攻撃にも敏感である。防御よりも避けるというコンセプトを持つアストレイはミサイル一つで簡単に

やられる。

ウィリアムは近づく戦闘機をイーゲルシュテルンで追い払い、敵の空中援護を減らそうとしていた。

彼を撃墜しようと接近する戦闘機もシールドを使って叩き落としていった

「流石は我が隊長、俺もがんばりますか…」

アキラは遠距離用ビームライフルで遠く離れた敵を一つずつ落とすていく、敵も反撃しようとするも、距離が長すぎて撃ったビームが当たらない。

スミスとマコトも防衛エリアへ侵入した敵を押し返していた。

「おらおらあ！このジャスティン・スミス様が相手だあ！俺を倒すまで、オーブは落とせんぞ！」

スミスは近くのストライクダガーをサーベルで右腕を斬り落とし、蹴り倒した。パイロットはスミスの戦い方に恐怖し、機体を放棄した。

「次は誰だあ！！」

派手に動き始めるスミスは敵の注意を引き付けた、気を取られた隙にマコトが接近して何が起こったかわからないまま撃墜される。

07隊の援軍により、B6エリアの敵部隊を押し始めた。

戦局はほぼ互角であったが、連合軍に奇妙な動きが発生した。

オーブ近外の海で待機していた連合艦隊の旗艦から撤退の信号弾が空に向けて撃っていたのだ。それに応じた連合部隊は負傷した味方機を拾って

撤退を行い始めた。

「撤退した……？」

「へっ……連合も大した事ないな」

スミスは勝ち誇ったように言い出す。

それを聞いたウィリアムが口を開く。

「それは違うぞ、スミス……奴らは小国の我々を甘く見ていた、すべての戦力を出してはいなかったはずだ。それに、俺達はもうボロボロだ、大半の防衛

システムが麻痺状態、味方機も大半が負傷、及び戦闘不能。次に攻

めて来た時は……」

その時だった、ウィリアムにメッセージが送られたのだ。

「これは新たな命令…アーシエン二佐から？という事は、本部は無事なのか？」

「不幸中の幸いですね。指揮系統が崩れていないなら体制は立て直せる。」

「何が書かれているんです？隊長。」

マコトの質問にウィリアムはアーシエンの電通を読み上げる。

「トモヒサ・アーシエン二佐直々の命令だ。オーブは会談を要求、休戦に持ち込むまで本隊はこれよりエリアの警戒及び、防衛態勢に入る。」

嫌な予感がしたのか、スミスは頭にある疑問を聞いてみた。

「作戦の期間は？」

「今、軍は連合との会談を要求している。なんとか休戦に持ち込むまでか、それとも再び攻めてくるまでか…」

「それじゃいつまで終わるかわからねえぞ！徹夜かもしれねえ」

「だから無駄な体力は使うな。最初は俺とラム三尉がやる。2時間おきに交代だ、その間に休め」

「ちっ…」「了解」「」

これによって、しかし機体の補給はなんとか受け取ったが07隊は

休む事はできなかった

夜空の星を見上げていたマコトはこれまでの事を思い出す。今日は彼にとつての初めての**実戦**。

今回は生き残れたが次はこうはいかないかもしれない。また連合が攻めてきた時はどうなるのだろうか？

不安を胸に抱きつつ、次の日を迎えるのであった……

二話へ続く…

## 第二話 〈陥落〉

「うおっ……ぐあああああああ！」

「あいつ、味方に気を取られているから！」

傍にいた味方機の撃墜を見たウィリアムは怒りの表情を見せる。連合の集中砲火を受けるオーブ軍は反撃のチャンスに恵まれないまま、戦力を削られていく。

6月16日

一度は撤退した連合軍だったが、夜明けと共に再びオーブに侵攻、敗北を悟ったオーブ軍は部隊を宇宙へ撤退する事に決定。

今のオーブ軍は“国を守る”ではなく、“時間稼ぎ、ようは足止め”という命令で戦っていた。

激しい戦闘が続いている中、

町の残骸を単独進んでいるストライクダガーがいた。

部隊とはぐれたのか、1機だけで前進している。しかしこれはあまり危険すぎる行動であり、敵にとっては都合いい事である。

「今だ！」

建物の裏から突如現た、1機のM1アストレイ

左手に装備しているシールドでダガーを後ろの建物に押し倒す

シールドはうまくライフルの握っているダガーの右腕と頭部を抑えていて、反撃される事ができなくなった

ダガーは左の盾を捨て、サーベルを抜こうとした時、M1の頭部はコクピットハッチに向けていた

「そうはさせない！」

マコトはトリガーを押し、ダガーのコクピットは無数の銃弾を浴びながら動きが止まり、そのまま地面へ崩れ落ちた。

「やったな、ラム三尉」

近くの建物の頂上からもう1機のM1、アキラ・ワカタが現れた

「敵がもつと単独で来たら戦いも楽になりますね。」

マコトは前回の戦いを見て、連合軍の大半のパイロットはマコトより劣っている事が判った。

その理由は経験の差……

ナチュラルのOSが出来上がったばかりの連合軍は自軍のMSを使い初めてからまだ一ヶ月も経っていない。

アストレイ開発当初からMSのテストパイロットとして関わっていたマコトら07隊にとって連合軍のパイロット達は素人である。タイマンなら勝てる。

しかし、素人は連合だけではなかった。

「我々をクサナギへ配置？」

『うむ。07隊はここで失う訳にはいかん』

「……しかしアーシエン二佐、我々よりも経験の少ない新米兵は？  
彼らはここにおいては犬死になるだけです！」

経験の少ないのはオーブも同様である。周囲に死に行く仲間や敵の  
悲鳴を聞いてパイロットは動揺してしまい、その隙に敵に撃墜して  
しまう恐れもある。

今のオーブ軍MSの半分は07隊含む少数のベテラン達が援護でな  
んとか保ち続けているが、それも長くは持たないであろう……

ウィリアムはクサナギとマスドライバーの防衛をそんなヒヨッコ達  
に任せる事を拒んでいた。

『フルズ一尉、気持ちは分かる。しかし私も命令で動いているただ  
の将兵に過ぎない。これはウズミ様からの決行だ』

「……了解しました、07隊はただちにマスドライバーへ移動しま  
す。アーシエン二佐もクサナギに？」

『ふっ、いやクサナギが上がった直後に連合に降伏する用命じられ  
た。だがこれで娘もクサナギに配置する事ができた』

トモヒサには17歳の同じ軍属にいる娘がいる。娘を戦死か捕虜に  
させないように、自分が地上に残ると引き換えに愛娘を安全な場所  
へ避難させた。

多分ウズミ・ナラ・アスハも娘、カガリの安全の為に07隊を宇宙  
へ上がらせたいのだろう。

トモヒサとの通信を切ったウィリアムは命令を伝える為、通信を0  
7隊に繋いだ。

「本隊はマストドライバーへ移動し、クサナギで宇宙へ上がる事になった。」

「え？」

「宇宙……ですか？」

「それって逃げるって事ですかあ？一尉！」

マコトに続いてアキラ、スミスも気に入らない返事をした。

「はあ……」

ウィリアムは溜息をし、話を続けた。

「そうだ。俺達はなんとしても組織壊滅を逃れて宇宙へ逃げなければならぬ……しかし！俺達が船にかくまっている間、下手なヒョッコ達に尻を守らせるのは気にいらん！だから俺はここに残る。お前達はどうする？」

ウィリアムは3人の部下に目を向ける。マコト達の答えは一致していた。

「答えはわかってるんじゃないですか、一尉？」

「へっガキらに俺達を守らせておいて地上に上がれるかっての！」

「隊長おいて行く気はありませんよ。」

部下の任意を受けたウィリアムは一息する

「アーシエン二佐にはすまないが今回だけは命令違反だ、野郎ども、俺について来い！」

「……了解……」

戦いが続く中、マスドライバーからアークエンジェルが発射される  
マスドライバーの防衛中の07隊は宇宙へ飛ぶアークエンジェルに  
敬礼した

「まだクサナギが出てない、抜かるなよ！ん？これは……！」

ウィリアムは不明の電波をキャッチした、アキラもこれに気づき、  
電波の内容を読み上げる

「これは近くの港からです……民間船の護衛が必要、こちらにM  
Sを1機だけでも送れ、との事です」

「まだ逃げ遅れた民間人がいたのか？」

避難警告が始まってもうすぐ一日経っていたにも関わらず、まだ避  
難が完了していない事にスミスは呆れた

誰を向かわせるか考えていたウィリアムは視線をマコトに向けた。

「ラム三尉」

「一尉？」

「行け、民間船はお前に任せる」

「え！？自分が、ですか？」

「07隊が投降した時、お前だけが不安だからな」

「不安って……」

マコトはウィリアムの不安に気づき始めた。

「お前はハーフコーディネーターだろう！」

「あ……」

「多くのコーディネーター市民を持つオーブが反コーディネーター  
である連合に占拠したらどうなる？連合は容赦なく反コーディネー  
ター行動を起こすだろう。そうなればお前がこの戦いを生き延びて  
もすぐに殺される」

「でも一尉、俺は兵士になった以上、殺される覚悟はできてます！」

「これは命令だ！マコト・ラム三尉、ただちに港へ行き、最後の民間船を護衛しろ！」

「しかし……」

これではマコトはクサナギへ避難するのと同じ様な事であり、仲間を見捨てることなどマコトにはできなかつた。

「……早く行けよ。こんな奴らお前無しでも十分だぜ」

「安心しろ、俺達はゴキブリ以上だからな」

「スミス二尉、ワカタ二尉……」

仲間ここまで言われれば、残る訳にはいかないとマコトは判断した。

「行け！なにもたもたしている！」

「……了解しました、ラム三尉これより護衛任務に向かいます。」

「第07MS隊、護衛任務に付くマコト・ラム三尉に敬礼！」

コクピットの中で07隊は敬礼をし、マコトもそれを返し、そして森の奥へ消えてしまった

「野郎ども、派手に暴れるぞ！クサナギが出るまで死守だ！」

「了解……」

そして、07隊は接近する強大な敵部隊へ突撃するのであった……

港は酷い有様であつた。花畑であつた場所が吹き飛ばされ、逃げ遅れた人たちの死骸もあつた。

怒りに耐えて、歯を食い縛りながら目的の船を捜す。

「あれだな」

港へ着いたマコトは民間船を発見。側には2隻のイージス艦。

その1隻には1機のM1がもう乗っていた。

「護衛の奴だな？早く空いてる方へ乗れ！もう出発するぞ！」

M1からの通信を聞き、マコトは急いで空いているイージス艦の上に乗る。

そして3席の船が陸を離れ始める、

「これで一応民間は安全だが……皆は？」

だいぶ島から離れ、マコトの視線はマストドライバーの方向を向く、そして……

「あ、あれは！」

海から見えた風景は宇宙へ飛ぶ青き艦、クサナギと崩れ行くオーブ誇りのマストドライバーであった……

「そんな！あそこにいた皆は！？」

三話へ続く……

### 第三話 〈大島〉

「ドッキングを急がせろ！アークエンジェルを持たせる訳にはいかない！」

宇宙、

オーブを脱出したクサナギとアークエンジェルはクサナギのドッキング作業で動けなくなっていた

ドッキング作業で忙しい中、クサナギの艦長、レドニル・キサカーは自軍の戦力をコンピュータで見ている。

「やはり07隊が確認できない。乗り遅れたのだろうか？」

07隊はマスドライバーの最終防衛ラインにいた事は確認していた。クサナギへの配置命令も確かに伝えたはずだ。合流前に全滅してしまっただのか？

そんな時、一人の整備兵がブリッジに入る

「リイータ・アーシエン一曹、報告に参りました」

リイータはキサカーに敬礼をする

「アークエンジェルからマリュー・ラミアスとムウ・ラ・フラガがデッキにおいでです」

「判った。今いく」

「そして07隊の件なんですが……」

「その事だが、07隊はクサナギへは乗っていない。既に確認した」「そう、ですか……」

リイータはそのままキサカーに敬礼をして、ブリッジを出る

「せっかくお父さんに頼んでマコトをクサナギへ配置してもらったのにマコトが部隊ごといないなんて……」

廊下を歩く途中、リイータの動きは止まり、廊下の窓から地球を見下ろした

「死んだ、わけないよね」  
リータは溜息して、呟いた  
「マコト、あなたは何処にいるの？」

同時刻、地球

「こんな物が作られていたなんて……」

マコトは信じられない光景を目の当たりにしていた。地図には何も無かった海のと真ん中に島があったのだ。しかもおよそ数10キロの広さにマストライバーまである。

今、彼が立っている場所は人間によって作られた島、いわゆる人工島。物凄くデカく、そして浮いて動くこの島はギガ・フロートと呼ばれている。

つい最近ジャンク屋組合が壮烈な人数で作り、出来上がった物で、オーブ襲撃を聞いた組合はギガ・フロートで避難してくるオーブの民間人や残存

戦力を保護しに来たのだ。

ドックでは船から多くの民間人が下りていき、ジャンク屋達やオーブの軍人に誘導される。

機体から降りたマコトも先にギガ・フロートへと避難したオーブ軍が使われている建物へと案内された。

ある部屋へと入ったマコトを待っていたのはテーブルに手を置く数人もの将官がいた。

「所属と本国の戦闘後の経歴は？」

一人の将官に質問を聞かれるマコトは真っ直ぐに立ち、将官へ敬礼

した。

「第07モビルスーツ隊所属、マコト・ラム三尉でございます。隊長からの命令で民間船を護衛をしていました」

マコトの報告を聞いた後に将官達は不機嫌な顔になり、自分達で話始めた。

「07隊は命令でクサナギへ移行した筈だが？」

「あのフルズ一尉が命令を拒んだに間違いない」

「だが、彼らはマスドライバーの自爆まで抵抗してたと聞いている」

「しかし、あれも命令違反の他でもないが……」

「命令を伝えたアーシェン二佐にも責任がある」

幾つか気に障る言葉を発したが軍人である身のマコトは目の前の上官には何も言い出せなかった。  
自分達で話し合いを終えた将官達は返事を待つマコトへと目を向ける。

「御苦労だ、多くの民間人を守った事は事実。よくやったと言うべきか。君の今後の事だが……トダカ一佐！」

「はっ！」

入り口付近にいたトダカ一佐は将官の呼びかけで前へ進み、マコトと並べる。

「ラム一尉はお前に任せる、ではいい」

「はっ！了解しました」

マコトとトダカ敬礼し、入り口まで歩き、もう一度将校達に敬礼して、部屋から出る。

廊下を黙ったまま歩いていたやがてトダカが話しかける。

「あいつらの事は気にするな。彼らも彼らなりに考えているのだ」

「分かっています、ただ納得いかないだけです。隊長達がやった事を否定している見たいで……それにアーシェン二佐は何も悪くはあ

りません」  
建物を出た二人はそのまま歩き続ける。

「本国での戦いで、我々は多くの物を失った、」  
トダカは動きが止まり、目を瞑った。

「国を、理念を、仲間を、そして家族を失った」

(仲間……)

マコトは07隊を思い出し、自分の無力さに怒りを感じた。

「それは我々軍人や政府だけで良かった、しかし現実はそう甘くは無い」

マコトとトダカはしばらく話し合い、気づけば公園の様な場所まで歩いていった。

そう言い、トダカは公園のベンチに座っていた一人の人物を見つめた。

彼の見つめた先は14、5歳程の黒髪の少年、  
ただ下を向いたまま、何も動じず、魂がない、まるで抜け殻のようだった。

「あの少年は？」

「戦争の犠牲者だ」

トダカは両手を握り始めた。

「彼は愛する家族を失い、生きる意味を失った。私達オーブの軍人が守るべきはずの市民を守れなかったのだ」

怒りと悲しみに満ちた声で話すトダカにマコトは何も言えなかった。  
「彼にはせつかくの人生を無駄にはいけない、それは無論、君も同じだ」

その時、ジープが一台やってきた。

「迎えだ、では私はこれで……」

マコトはジープに乗るトダカに敬礼

「君の今後は自分で決めろ」

「え？」

「好きにしろ」という事だ」

軍人らしかぬ命令にマコトは戸惑う

「今はチャンスだ。やりたい事やできる事をやれ」

ジープが走り始め、消えた後もその方向をマコトは動じずにいた。

「今の俺にできる事は一体何なんだ？」

マコトはそう言い、遠くに立つジャンク屋の旗を見つめた。

四話へ続く…

## 第四話 〈落下〉

オーブ制圧後、MSを大量生産した地球連合軍はアフリカのビクトリア戦、そしてヨーロッパのカサブランカ戦に投入した。ザフトは地球上での勢力を大幅に失い、宇宙で戦力を増強する事になる。

### 第四話 《落下》

戦いの後片付けをするのはジャンク屋であった。大半のジャンク屋は次の目的地を転々と移動している。

そんな中、ザフトと連合の両軍から誤認で攻撃されるのはよくある事だった

ギガ・フロートに暫くいたマコトだったが自身のMSパイロットの腕を生かし、ジャンク屋のお手伝い兼ボデイガードとなった

彼の現在位置は南アメリカ上空

この宙域はザフトが占領していた元連合のパナマ基地と南アメリカの連合軍勢力の間にあり、常に戦闘が起こっている場所でもあった。

「どうだ。だんだんこの仕事も慣れてきただろ？」

ジャンク屋の輸送機を操縦する中年の男は奥で座っていたマコトに聞いてきた。

「ははは、慣れるも何も、機体に乗って重たい物運びぐらいしかや  
つてませんよ」

マコトはそう言い、無限に広がる森を見下ろす。

彼に今は何処を飛んでいるのかはどうでもよかった。

唯、他の仲間達の事が心配であった。

クサナギと共に宇宙に上がったリーダーや生死も確認されていない  
07隊の仲間達。

(俺は生きているよ、皆はどうだい?)

ピピピピ...

「え?」

我に返ったマコトはこの音はなんなのかをジャンク屋の男に聞く。

「反応だ。これはモビルスーツが近づいてくる」

嫌な予感をしたマコトは席から立ち上がり、デッキの方へと向かっ  
た。

「機体で待機します」

「あいよ、ん?なんだと...!」

反応音が突然アラームに変わり、画面からは『ALERT!』との  
文字が現れた。

「ロックされただど!?!」

ジャンク屋の男はすぐに自分がジャンク屋所属の者であり、相手に危害を加えるつもりはないと伝えたが相手はそれを拒否し、

「こちらはザフトパナマ防衛軍、我々は貴艦は連合軍の補給物資を積み上げていると報告されており、撃沈命令を遂行している。言い訳は無用である！」

ザフトのパイロットはそう言い、一方的に回線を切ってしまう。

「そんな勝手な……！」

男は絶望に満ちた声で言う

すると今度は画面からM1アストレイのコクピットに着いたマコトが映し出される

「出撃します！」

「馬鹿を言つな！今出たら戻る事なんてできないぞ！」

「これもボデイガードの役目ですよ！」

マコトは起動したM1を立ち上がらせ、傍にあった前の仕事で入手したグウルへ移動する

「このグウル、借りますよ！」

立ち上がったM1はライフルとシールドを拾い、グウルへ乗り始める

「ぐう……すまねえ、小僧」

「おじさんは逃げる事だけを考えて」

マコトは開いたハッチからグウルを発進させ、機体を外へ出した。

輸送機を追撃していた2機のデインは現れたM1に驚き、動きを止める

「あれはオーブ製の機体だ。なんでこんな所に？」

「関係ない！打ち落とすぞ！」

2機のデインは銃をM1に向けて撃ったがそれをかわし、イーゲルシュテルンで反撃される

モビルスーツとの戦闘を想定しなかったため、装備は対空用の散弾銃と固定の6連装多目的ランチャー。シールドや回避能力を持つMSには不利なのだ。デインからもう一発打ち出された散弾はグウルを掠り、機体をよるめいた

「ぐ！なんて扱えにくいんだ」

空中戦は初めてのマコトはグウルで思うままコントロールできず、相手の攻撃をうまくかわしきれなかった

長期戦は無理だと悟ったマコトは今度はグウルを敵機になるべく近くに接近させて攻撃する戦法を選んだ

「お前は輸送機を追え！こいつは俺に任せろ」

そう言い、マコトのM1アストレイが接近するのを確認し、僚機から遠く離れるよう誘導した

「させるかよ！」

オーブ戦で対多数戦に慣れていたマコトはどの一機に気を取られなく両機の動きを注意していた。グウルの向きを変え、全高速で離脱するデインを追う。すこしの間世話になったジャンク屋の男を死なせるわけにはいかなかった。逆に無視された引き離し役のデインもマコトの後を追う

「特攻か！」

M1アストレイの猛接近に気づいたデインは向きを変え、装備しているすべてのミサイルと散弾をM1へ放つ

「ぐう！！」

M1は攻撃を盾で防ぐが、防御力を持たないグウルは無数の散弾とミサイルの直撃を浴びるがそれでも猛スピードでデインへと向かう

「今だあ！」

マコトは機体をグウルから引き離れた。操縦者をなくしたグウルはそのまま呆然としていたデインへぶつけられ、巻き込まれたデインと共に爆散する。

「き、貴様あ……………！」

追いついたもう1機のデインは僚機を失った怒りに満ちてM1に発砲する。

「残すはお前だ！」

マコトはそう言いながらシールドで防御するが反応が遅すぎたのか、一部の散弾がM1の頭部に当たり、右方のアンテナを折ってしまう。

「グウル無しの空中戦で勝てると思うな、ナチュラルめ！」

デインは攻撃を止めず、今度はミサイルを放つがM1に回避されライフルで反撃される

「もうすぐ限界だ……………早くこいつを倒さないと！」

マコトは焦り始めた。本来飛行能力を持たないM1アストレイは限界に近づいている。この上空から地面への距離はいくらMSでも粉々になるかもしれない。

「うまくいけるか？」

覚悟を決めたマコトはデインに向けてスラスター全快で接近、相手に飛びつく

「こいつ！離せ！」

M1アストレイによつて左腕を封じられるが銃を持つ右腕で機体から離れるように散弾を撃つ

至近距離から撃った散弾の勢いはシールドだけでも防げず、のまれたM1はデインから放され、地球の重力に引かれるまま地上へと落ちていく、しかしそれに関わらずM1は手にしていたビームライフルでデインを狙いに定めていた。

「しまつ……！」

アラートに気づいたザフト兵は回避する暇も無く、ライフルから発射されたビームはデインの胴体を貫き、直後に跡形も無く爆散する

「やった……でもまだ終わってない」

戦いに勝った事に喜んだマコトだが、まだこの落下から生存する必要があつた。重力によつて加速するスピードを止めなければならぬ。マコトは機体を空に向けて残っているパワーでスラスターを全快で吹かす。スラスターの勢いで引力と相殺する考えだがもう地面が近づきつつある

「間に合ええ……！！！！！！」

アストレイの脚が地上についたと同時に機体は大きな衝撃を受ける。コクピット内の大きな揺れが終わった事を確認したマコトは機体のチェックをする

「脚部に異常、それにさっきので機体はオーバーヒート。これはヤバイな」

マコトはコクピットハッチを開いて、辺りを見渡す

「これがアマゾンか……」

巨大なジャングルの中でマコトはこの対応にどうするか悩み始める

五話へ続く…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5057d/>

---

機動戦士ガンダムSEED外伝 ~ C . E . 大戦秘話 ~

2010年10月11日11時33分発行